

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い —キンダーカウンセラーへの相談内容の分析から—

大岡 千景 (キンダーカウンセラー)

原口 喜充 (近畿大学九州短期大学)

Differences in Kindergarten Teachers' Concerns for Children of Concern Based on Years of Experience
Insights from Consultations with the Kindergarten Counselor
Chikage Ooka (Kindergarten Counselor)
Hisami Haraguchi (Kindai University Kyushu Junior College)

要旨

保育現場において“気になる子”は増加傾向にあり、多くの保育者が対応について悩んでいる。そこで、本研究では、①保育者の“気になる子”についての悩み方を明らかにすること、②悩み方に経験年数による違いがあるのかを明らかにすることを目的とした。方法としては、まずキンダーカウンセラーとの相談内容について保育者へインタビューを実施した。次に、行ったインタビューの内容を逐語に起こし、共起ネットワーク図を描画した後、実際の語りの内容を確認した。分析の結果、若手保育者は目の前の保育について困っており、中堅保育者は園と保護者や集団と子どもといった関係性の中で悩み、ベテラン保育者になると悩み方に傾向はみられなかった。また、若手保育者は具体的なアドバイスを求めており、中堅保育者からベテラン保育者になるにつれて保育者自身が方向性を定めつつ相談している等、保育者の経験年数によってキンダーカウンセラーの活用方法にも違いがみられた。

キーワード：気になる子、保育者、経験年数、キンダーカウンセラー

Abstract

The number of "children of concern" in kindergartens and nursery schools is increasing, and teachers struggle to manage these children. Therefore, this study aimed to clarify how kindergarten teachers are concerned about "children of concern." Further, it sought to elucidate whether there are differences in how teachers are concerned based on their years of experience. First, we interviewed the teachers about the content of their consultations with kindergarten counselors. Next, the content of the interviews was transcribed verbatim. After drawing a co-occurrence network diagram, the actual content of the narratives was confirmed. The analysis revealed that young teachers were concerned about the current childcare situation. Mid-career teachers were concerned about the relationship between the school and parents and between the group and children. Moreover, no significant trend in the content of veteran teachers' concerns was observed. Younger teachers sought specific advice from kindergarten counselors, whereas mid-career and veteran teachers used the counselors to guide their decision-making. This suggested that using kindergarten counselors varied depending on the teachers' years of experience.

Keywords : children of concern, kindergarten teacher, years of experience, kindergarten counselor

1. はじめに

保育現場でカウンセラーとして活動していると、保育者より個別に支援が必要だったり関わりが難

しかったりする所謂“気になる子”に関して相談されることが多い。池田らが 2007 年に行った調査では、気になる子の増加を感じている保育者が増えていることが示されているが、2024 年現在も現場の

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

保育者から「気になる子が年々増えているように感じる」、「その対応に困っている」という話を聞くことは少なくない。

全国保育協議会が 2016 年に行った調査によると、「障害児・発達に気になる子どもへの対応」についての施設内研修は、正規職員へ 75.0%、非正規職員へは 69.1%実施されており、気になる子への対応は保育現場において重要度が高いことがわかる。また、2021 年に行われた調査では、回答を得られた施設全体の 76.6%において障がい児保育は行われており、障がい児保育を実施している施設のうち、障がい児保育の対象ではない特別な支援を必要とする子どもは 83.8%において「いる」と回答されている。さらに、先行研究では診断のない気になる子への支援の必要性が指摘されており（原口ら、2013）、保育者は発達障がい等の診断がある子どもだけでなく、未診断の気になる子に対する支援も考えなければならない。加えて、気になる子に対しての支援を行う場合、家庭との連携が重要となるが、保育者は保護者へ発達に関して課題があると伝えることに心理的負担を感じていると指摘されている（木曾、2016）。そのため、気になる子への対応においては、その子どもに対してのみでなく、保護者への支援の点においても保育者が悩むことが推察される。

保育現場における気になる子への対応を保育者と共に考える存在の一つにキンダーカウンセラー（以下、KC と表記する）がいる。KC は、児童生徒の心理的な発達を援助することを目的に、1995 年から配置されているスクールカウンセラーの構造をモデルとしたものである。KC を務めるのは、主に臨床心理士や発達臨床心理士等であり、園との契約によって定期的に訪問するものとなっている。安家ら（2004）によると、KC の活動は 2003 年に幼稚園における子育て支援の一環として、大阪府内の 40 園にて開始され、当初より保育場面での子どもの観察内容を活かして保育者や保護者との相談が行われていた。大阪府から始まった KC の活動は広がりを見せており、2009 年から京都府、2018 年からは兵庫県において開始され、現在は関西圏以外の地域においても KC によるキンダーカウンセリングの活動がみられる。

KC と類似した役割を持つものとして園に心理職が出向いて子どもについて等の相談を受ける巡回相談がある。原口ら（2018）は巡回相談と KC を比較した上で、KC の特徴として「専属性」を指摘しており、園と直接契約を結ぶことで園のニーズへ柔軟に対応できることに加え、継続的な関りを持つことによって園に「根付く」としている。また、保育者は KC との間で、「効果的にコンサルテーションが機能しているときには【保育者が支援された感じ】」を経験しており、KC は保育者支援の側面も担っている（原口ら、2022）。

KC の保育者支援に関して菅野（2004）は、幼稚園、特に私立幼稚園の保育者は平均年齢が若いため保護者との対応に苦慮しており、KC から専門的な理解や第三者的な立場からの見方、支持を得られると、安定して保護者と関われるようになると指摘している。他の保育者の経験年数に着目したこれまでの研究においても、若手保育者が経験年数の少なさによって、対応がわからなかったり自信が持てなかったりすることで他者からの評価に過敏になっている傾向があることが指摘されている（原口、2016）。その他の先行研究（衛藤、2015；佐藤ら、2017 等）においても保育者の経験年数によって保育への向き合い方に違いがみられていた。また、先行研究では保育者の経験年数による心理職との関わり方の違いについても指摘されており（原口ら、2018）、経験年数によって保育者の持っている経験や知識、技術は異なっており、それ故に悩み方にも違いがあると考えられる。

日光（2018）は保育者と KC との関りについて質問紙調査を行い、「特に気になる子どもの保育については、経験年数によって変化する課題に対し、期待に応える支援を受けることで高い効力感をもって保育を実践している」とし、経験年数の異なる保育者へ KC が役立っていることを示している。しかし、保育者に対して KC への相談内容についてインタビューを行い、経験年数の異なる保育者がどのように悩んでいるのかについて検討している研究は見当たらなかった。保育者自身が経験年数ごとに感じている悩みの違いを知ることは、それぞれの難しさを予め想定することや、必要な支援を検討することに繋げられると考える。よって、本研究では保育

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

者の経験年数によって、気になる子に関する悩み方に違いがあるのかを明らかにするため、KC への相談内容についてのインタビューを行い、分析することとした。なお、本研究における“気になる子”は丸山（2008）の「気になる子ども」という子どもが存在するわけではなくて「気になる」と感じているのはおとなの側」という考えに基づき、障がいの有無に関わりなく、保育者が気になると感じて KC との相談を行った子どものこととする。

2. 方法

1) 研究協力者

10 年以上キンダーカウンセリングを継続的に利用している園を対象とし、機縁法を用いて 6 園の協力を得た。研究協力者は各園において経験年数が異なる 2 人または 3 人とし、対象は担任保育者とした。17 名の協力が得られ、全員が女性保育者となった。平均年齢は 30.82 ± 8.67 歳、平均経験年数は 7.24 ± 5.01 年、KC と関わった平均年数は 4.88 ± 2.93 年であった。このうち、青井ら（2014）を参考に経験年数が 1 から 3 年の保育者を若手、4 から 9 年の保育者を中堅、10 年以上の保育者をベテランと定義した。その結果、若手は 5 人、中堅は 6 人、ベテランは 6 人となった（表 1）。

2) 倫理的配慮

研究協力者に対してはインタビューの前に研究の概要及び目的の説明を行った。その際に、研究協力は任意であり、同意後であってもいつでも協力を撤回することができる旨を伝えて実施した。なお、本研究は富山短期大学の倫理審査を経て承認を得ている（承認番号：R2-14）。

3) 分析データ

研究の同意を得られた保育者に対し、対面式もしくはオンラインの会議システムを用いた非対面式にてインタビューを行った。インタビューは半構造化面接にて実施し、インタビュアーは 1 名または 2 名であった。時間は 90 分程度であり、許可を取った上で IC レコーダーにて録音し、逐語に起こしたものを分析するデータとした。

4) 分析方法

保育者の語りの中から、KC と共に取り組んだ印象的な事例についての語りを分析対象とした。分析には KH Coder (3.Beta.07) を用いて単純集計を行い、共起ネットワーク図を描画した（樋口，2004）。共起ネットワーク図とは、一緒に使われていることが多かった語同士を線で結んで示した図であり、近くにある語であっても線が結ばれていなければ共起関係にはない。また、分析の際に外部変数を保育者の経験年数とし、経験年数ごとに用いられた語の違いがあるのかを検討した。その後、それぞれの経験年数で用いられた語の実際の語りの内容についても検討を行った。

3. 結果

1) 単純集計

保育者の語りに使用された単語を出現回数が多かった順に表 2 に示した。最も出現回数が多かった語は【子】で 440 回であり、次いで【言う】が 256 回、【思う】が 241 回であった。なお、語を抽出する際、お母さんや母、母親といったように呼び名が複数個あった語については【母】【父】【子】と指定して抽出した。また、【先生】については保育者と KC のどちらを指すかを区別するために KC を先生としているものは全て【KC】と置き換えた。なお、感嘆詞及び一般動詞の一部と特定の保育者のみで集計結果の 9 割以上を占めているものは除外した。

2) 抽出語と外部変数の共起ネットワーク

抽出語と外部変数である保育者の経験年数の関連性を明らかにすることを目的に、共起ネットワーク図の描画を行った。本研究では関連性の強さは Jaccard 係数を用いており、抽出語の最小出現回数は 20 回と設定した。その結果、図 1 の共起ネットワーク図が描画された。

若手保育者と共起性の強かった語は【お話】【多い】【保育】【友達】【言葉】【他】【声】の 7 語であり、中堅保育者と共起性の強かった語は【最初】【入る】【前】【全然】【母】【幼稚園】の 6 語、ベテラン保育者と共起性の強かった語は【多分】【難しい】【結構】【話す】の 4 語となった。複数の経験年数と共起関係がみられた語もあり、若手保育者と中堅

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

表 1. 各経験年数の保育者の年齢及び経験年数.

	若手		中堅		ベテラン			
	年齢	経験年数	年齢	経験年数	年齢	経験年数		
A	23	1	F	25	4	L	55	10
B	23	2	G	26	4	M	35	10
C	22	2	H	24	4	N	32	12
D	24	2	I	36	6	O	41	15
E	24	3	J	26	7	P	37	16
			K	31	9	Q	40	16
平均	23.2	2	平均	28	5.7	平均	40	13.2

表 2. 各語の出現回数.

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子	440	入る	42
言う	256	多分	39
思う	241	声	36
見る	168	一緒	35
母	121	相談	35
感じ	120	変わる	35
KC	118	違う	34
先生	106	幼稚園	34
自分	97	言葉	33
聞く	93	前	33
今	85	多い	31
話	85	話す	31
伝える	84	クラス	29
友達	51	出る	29
困る	45	落ち着く	29

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

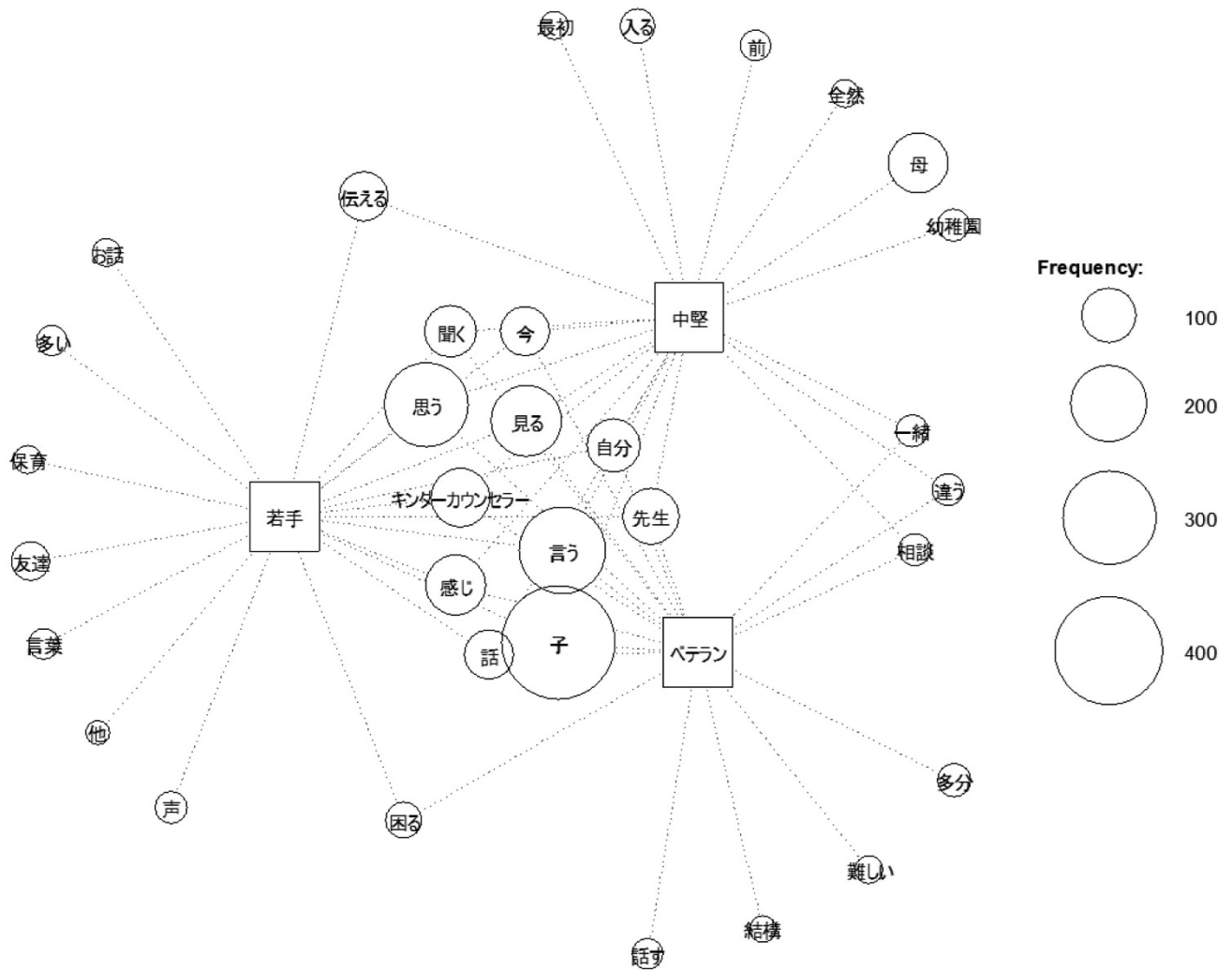


図1. 経験年数を外部変数とした共起ネットワーク図.

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

保育者において【伝える】の1語、中堅保育者とベテラン保育者において【一緒】【違う】【相談】の3語、ベテラン保育者と若手保育者において【困る】の1語に共起性がみられた。

①若手保育者の語り

【保育】【友達】【言葉】【他】【声】の7語について、どのような文脈において使用されているのかを知ることを目的に各語の語りの内容を確認した。また、語りを抜粋したものを表3に示した。

【保育】では「保育を進めている中でパッとその子を見たとき」や「保育の中にグッと入ってたら主観になってしまってる」といった保育をしている最中について語られていた。【他】では「他に第三者の目から見ていただいた」「他の保育者」といった周りの保育者からの意見を参考にしている語りがみられた。【お話】からも「専門のKCにもお話聞かせていただいて、他の保育者の先生からも、ああやっぱそうだったんだねってこう、お話聞きながら、ちょっとあ！一歩引けて、こう肩の荷が落ちたじゃないですけど、ちょっとフウと余裕持って聞けたかなと」や「保護者の対応についてもお話くださったので」といったように周囲からのアドバイスを参考にしながら保育に向き合っていると考えられる語りとなっていた。【多い】では「寝転んでいることが多かったり」「興味の方へ流れてしまうっていうのが多くて」と気になる子の行動の頻度に関する語りがみられた。【言葉】については「言葉で伝えてくれるようになって」や「言葉にして伝えられることが本当に少ない子」のように、子どもが言語化できるか否かといった行動面に関する語りとして用いられた。【声】については「切り替えられるように声かけたらいいね」や「事前に声かけたりとか」といった語りから「言っていたいたり」「助言いただいたことで」に繋がっているように、保育者が気になる子への対応についてアドバイスをもらいつつ声掛けを行っているという文脈の中でみられた。【友達】は「集団生活でお友達も作ってほしい」や「お友達泣いてるよ」といった集団の中にいる子どもに関する語りとして用いられていた。

②中堅保育者の語り

中堅保育者と共起性が強かった【最初】【入る】【前】【全然】【母】【幼稚園】の6語について、どのような文脈において使用されているのかを知ることを目的に各語の語りの内容を確認した。また、語りを抜粋したものを表4に示した。

【最初】や【前】を用いた語りは「最初は本当に話がなかなか伝わらない」「最初はみんなが部屋に入っても入ることができなくて」「行事前とかはしんどいな」「明らかに3か月前とは違うよね」となっており、時系列に沿って子どもの変化を語っていることがわかった。【入る】は「そこに入ってきてれたり」「入ってからの様子」といった集団に入った際の様子についての文脈で使用されていた。

【全然】は「今までかかわってきてる子と全然違った」や「全然その子が困ってることに気付かない」といった言葉を強調する際に使用され、特に周囲との違いや印象としての文脈で用いられていた。【母】や【幼稚園】は「お母さんにこう伝えはったほうがいい」「お母さんに自信もって、療育いかはったほうがって、やっぱり話しやすい」「幼稚園でも、その子自身ができるように」「幼稚園ではこんな様子です」のように、保護者との関りにおける悩みや園と子どもや保護者との関りについての語りがみられ、他の語りに比べて特に語りの数が多かった。

③ベテラン保育者の語り

ベテラン保育者と共起性が強かった【多分】【難しい】【結構】【話す】の4語について、どのような文脈において使用されているのかを知ることを目的に各語の語りの内容を確認した。また、語りを抜粋したものを表5に示した。

【多分】では「多分ね、あのその子もうちょっとこう心開いてくれてたかな」「多分本人の中で辛いのもあった」のような保育者自身の見立てや予想についての語りがみられた。【難しい】ではベテラン保育者であっても困難を感じる点についての語りがみられ、【話す】では「自分からたぶんあんまりそんなに話さないと思うので」や「話しているうちに、こうしてあげる？」のように、保育者がKCと行った会話についての語りとなっていた。【結構】は「結構口うるさくする部分もあったんですけど」や「結構この年中の後半ちょっとぼんっと気になる

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

表 3. 若手保育者と共起性の強い語の語り.

抽出語	実際の語り
お話	<p>なんか専門のKCにも<u>お話</u>聞かせていただいて、他の保育者の先生からも、ああやっぱそうだったんだねってこう、お話聞きながら、ちょっとあ！一歩引けて、こう肩の荷が落ちたじゃないですけど、ちょっとフウと余裕持って聞けたかなと(A)</p> <p>一番がああの保護者の対応についても<u>お話</u>してくださったので、それが一番助かりました(C)</p>
多い	<p>その子はちょっと入園当初から、寝転んでいることが<u>多</u>かったりとか、身体の軸がちょっと不安定で、歩くのもちょっと不安定になると(C)</p> <p>園に来た時にあまり保育室に真っ直ぐ来れないというか、自分の注意がいろんなところに散ってしまうじゃないですけど、なんか気が付いた興味の方に流れてしまうっていうのが<u>多</u>くて。(D)</p>
保育	<p>確かに今この<u>保育</u>を進めてる中でパってその子を見たときに、ああ今声かけれてないけど困っているのかなっていう表情が何回か見れて(D)</p> <p>やっぱり<u>保育</u>の中にグッと入ってたら主観になってしまっているとをちょっと一歩引いた目線で見てくれては人の意見をもらえたらより、現実味が増すというか、なんかすごい嬉しくはありました。(E)</p>
友達	<p>多分お母さまも幼稚園に入れさせたってことは集団生活で<u>友達</u>も作ってほしいしっていう想いもあると思うので。(A)</p> <p>今はわりともうそれはしてはいけないことだよっていうのを言うと、わかってくれるようになってきているので、かわすというよりは、もう<u>友達</u>泣いてるよとか、そっちの方向で、進めていってます。(B)</p>
言葉	<p>それが3学期くらいになると自分の思いをできるだけ<u>言葉</u>で伝えてくれるようになって、(中略)自分の思いを伝えてくれるようになったのでなんかそのことも、伝えさせてもらいました。(C)</p> <p>困った時に1人より2人で、気づいてあげられる機会を増やしてあげる、その子はもう <u>言葉</u>にして伝えられることが本当に少ない子だったので。(D)</p>
他	<p>いつも私が主となってクラスを回しているんですけど、<u>他</u>に第三者の目から見ていただいたときに、私が不安に思ってきたことが「そうやね」って聞いてくださったことが私自身すごく、子どものことっていうか私のことなんですけど、印象に残って。(E)</p> <p>自分の中では一人で、援助で対応できる、支援を付けなくても対応できるんじゃないかなって思っている面と、<u>他</u>の保育者から見たときに、やっぱり支援としてあげておいた方が成長に繋がるんじゃないかっていう意見があって。(D)</p>
声	<p>切り替えがちょっと難しいような子だったので切り替えられるように<u>声</u>かけたらいいねって言っていただいたり。(A)</p> <p>「体操を何時からするから何分でお片付けするからね」っていうのを事前に <u>声</u>を掛けたりとか、(中略)ちょっとずつ生活に見通し持てるように助言いただいたことでやっぱり見えるってことはすごく安心にも繋がってるんだなっていうことは思いましたね。(E)</p>

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

表 4. 中堅保育者と共起性の強い語の語り.

抽出語	実際の語り
最初	<p><u>最初</u>は本当に話がなかなか伝わらないお母さんやなっという感じだったんです、まあ、自分もちっちゃい頃なんか、そんなにコミュニケーション得意じゃなかったんでとか、(K)</p> <p>皆と集団ですることが出来なくて、<u>最初</u>はみんなが部屋に入っても入ることが出来なくて、(中略)集団が初めてってのがあって、慣れるまでは全然中にも入ってこれず、そうやってちょっと相談してって感じで。(H)</p>
入る	<p>最終クラスに戻したっていうのも大きかったんですけど、(中略)いつもと違うグループでも最後の方は一緒にゲームしたりとか、なんか「○○するで」って言ったらそこに<u>入</u>ってきてれたりとか、にならあったかな(F)</p> <p>ギャーっていう奇声をあげることがすごく多くて、周りの子供たちもちょっとびっくりしてしまうっていうところで、(中略)ちょっとまず<u>入</u>ってからの様子を伝えて、で一度目見ていただきました。(I)</p>
前	<p>運動会シーズンとかそういう行事<u>前</u>とかはしんどいなーと…でもなんかその子のためって、その当時わたしも下っ端だったので、学年主任の先生に相談してとか、一緒に協力してやって貰ったりとかもあって(H)</p> <p>明らかに3ヶ月前とは違うよねっていう姿なんかこう心の面での育ちっていうところに、なんかたぶん私も気付いてたんやろうけど、でも、その先の目標の方にばかりちょっと気持ちがいってて、(K)</p>
全然	<p>やっぱり今までかかわってきてる子と<u>全然</u>違ったから、そのどういう風に判断していいのかっていうのとか(G)</p> <p>なんか幼稚園ではこういうふうにしてるってことを伝えても、なんかこうポジティブにとらえすぎて <u>全然</u>その子が困ってることに気づいてないとか(J)</p>
母	<p>私は様子を伝えるしかなかったんで、様子を伝えて、お<u>母</u>さんにこう伝えはった方がいいとか、ここの子にはこういう対応の仕方の方がいいって言ってもらえて、(G)</p> <p>専門的にいってもらったほうが、こっちもお<u>母</u>さんに自信もって、療育いかはったほうがって、やっぱり話しやすい。(J)</p>
幼稚園	<p>ダメなことばかり言うんじゃなく、<u>幼稚園</u>でも、その子自身が出来るように、お家でもこんなことしてみてくださいとか、お家の人へのアドバイスも聞いたりとかはしてました(H)</p> <p>具体的に<u>幼稚園</u>ではこんな様子です、小学校に向けては、こういうことが必要だと思いますっていう風に、話はできたかなと思うんで。(J)</p>

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

表 5. ベテラン保育者と共起性の強い語の語り.

	実際の語り
多分	<p>お付き合いできてたら、<u>多分</u>ね、あのその子もうちょっとこう心開いてくれてたかなと思うんですけど、結局なんか私もこう全体ばかりね、全体のことを結構見ないといけなかったんで、(L)</p> <p>分散登園が始まってクラスでは落ち着いてたんですけど、だんだんマーチングが<u>多分</u>本人の中でつらいのもあったんだろうとは思んですけど始まったあたりから結構、部屋でも飛び出し、とかがするように(M)</p>
難しい	<p>今だから個性なのか支援が必要なのかがすごく<u>難しい</u>ところだな、と思っています。(Q)</p> <p>こうなんか、<u>難しい</u>じゃないですか、(中略)。例えばこういう風にやってほしい、やってみたらどうですか、みたいな具体的案が欲しいなっていうときもやっぱりあったりとか(M)</p>
結構	<p>マイペースだけやおもってたんで、<u>結構</u>口うるさくする部分もあったんですけど、実は困っている部分も多かったんやっていうのがわかったんで、(中略)ちょっと丁寧に関わるように気をつけたりしました。(P)</p> <p><u>結構</u>この年中の後半ちょっとぼんっと気になるようになってきて、この間そのもう相談した。まあ前から気になってもいたけど小さいからそんなもんなのかな。(O)</p>
話す	<p>その子のことでいうと、やっぱり、苦労した分、ちょっと助けを求め、自分から多分あんまりそんなに<u>話さ</u>ないと思うので、基本的にいつも。(M)</p> <p>でもなんか<u>話</u>してるうちに、こうしてあげる？っていうちょっとなんかまだまだこれからちょっと年長にあがられて、継続的に様子は見ていってあげないといけなかなとは思んですけども。(O)</p>

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

ようになってきて」といった強度を表す際に用いられていた。

④複数の経験年数に共起性がみられた語

複数の経験年数と共起性が強かった語について、どのような文脈において使用されているのかを知ることが目的に各語の語りの内容を確認した。なお、共起性が強かった語は若手保育者と中堅保育者において【伝える】の1語、若手保育者とベテラン保育者において【困る】の1語、中堅保育者とベテラン保育者において【一緒】【違う】【相談】の3語であった。語りを抜粋したものを表6から8に示した。

若手保育者と中堅保育者においては【伝える】に共起性がみられた。若手保育者の【伝える】の文脈は、「伝えるような言い方をキンダーカウンセラーからお聞きして」「伝えてもらったことで」といった手助けを得た話に繋がる用いられ方をしていた。一方で中堅保育者の【伝える】の文脈は「保護者に伝えることに向き合っている時に」や「幼稚園ではこういうふうに思ってるってことを伝えても」のように保護者対応に関わることが語られていた。

中堅保育者とベテラン保育者においては、【一緒】【違う】【相談】の3語に共起性がみられた。【一緒】については中堅保育者もベテラン保育者も「一緒にできるように」「一緒に聞いてみよう」「一緒にしてほしい」「一緒にやろ」といった、子どもが集団に関わることについての語りとなっていた。【違う】については中堅保育者もベテラン保育者も「対応が違った」「違う視点で」「違う方向にちょっと導いてあげるとか」「今はもう違うよって」といった、現状の保育とは別の視点や対応が気になる子に必要なであるという文脈で用いていることが多かった。

【相談】については中堅保育者もベテラン保育者も「その都度相談に乗ってもらってましたね」「相談して見てもらって」「ちょっと相談に乗ってもらったり」「ちょっと相談させてもらった」といった語りであった。若手保育者のようなアドバイスを得ている印象は薄く、気になったことについて話し合っている印象の強い語りとなっていた。

ベテラン保育者と若手保育者においては【困る】に共起性がみられた。ベテラン保育者は「困りみた

いなのをあげてくださった」「何かこう困りが出てきはったら、あかんで」若手保育者は「こういうことに困ってるっぽいですよっていうのも教えてもらえた」「こういう面で困ってるんですねって理解していただけて」と双方子どもが困っていることに関しての語りであった。ただ、若手保育者の語りは「KCからアドバイスいただいたことを」や「教えてもらった」とアドバイスを得ている傾向がここでもみられた。

4. 考察

1) 各経験年数の保育者の悩み方

①若手保育者の悩み方

若手保育者と共起性が強かった語は【お話】【多い】【保育】【友達】【言葉】【他】【声】の7語であった。内容としては、目の前の保育で起きていることについて悩んでいる語りがみられ、それについて周りの保育者やKCからのアドバイスを参考にしている語りが多くみられた。

秀ら(2020)の受容に関する保育者の捉え方を経験年数ごとに調査した研究において、若手保育者の記述内容は「目の前の保育と密接な関係が現れたもの」であったとされている。本研究においても若手の語りは目の前の保育についてのものが多くみられ、先行研究と重なるものとなった。また、足立ら(2010)の研究では、若手保育者には「①自分の気持ちに共感してくれる人の存在」と「②現在、抱えている問題を実際に解決してくれる人」の存在が必要だとされている。本研究においても②に関わる“助けてもらった”“教えてもらった”という意味合いのある【お話】してくださった」といった言葉が多くみられ、同様の傾向がみられている。そのため、若手保育者は目の前で生じている気になる子への対応について、経験年数の少なさから自信が持てなかったり技術不足を感じて悩んだりし、それに対して実際に解決につながるようなアドバイスを求めていると考えられた。

②中堅保育者の悩み方

中堅保育者と共起性が強かった語は【最初】【入る】【前】【全然】【母】【幼稚園】の6語であり、【幼稚園】【母】といった語りが特に多かった。実際の語

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

表 6. 若手保育者と中堅保育者に共起性が高い語の語り.

抽出語	経験年数	実際の語り
伝える	若手	男性目線プラスよりよく <u>伝える</u> ような言い方をKCからお聞きして、あ、そういう考えもあったんか、っていう風に、(C) こういう風に関わればもっと伸びると思うっていう支援を付けるマイナス的なイメージだけじゃなくて、プラスのイメージを <u>伝えて</u> もらえたことで、私も一歩踏み出すことができましたし、(D)
	中堅	まあ保護者に <u>伝える</u> 事に向き合っている時に、まあやっぱりちょっと辛いことがあるけど、なんか話を聞いてもらってなんか自分のカウンセリングしてもらったみたいな感覚に(K) 幼稚園ではこういうふうに思ってるってことを <u>伝えて</u> も、なんかこうポジティブにとらえすぎて全然その子が困ってることに気づいてないとか、(中略)そういうお母さんがいはって、(J)

表 7. 若手保育者とベテラン保育者に共起性が高い語の語り.

抽出語	経験年数	実際の語り
困る	若手	園でこういうことに <u>困</u> っているっぽいですよっていうのも教えてもらえたし、そういうところで、そのKCとお母さんが話してくれているっていうのがまた、しっかり伝えてもらえたっていうのと(D) KCからアドバイスいただいたことをお父さんに話すと、あ、そうなんですって、でこういう面で <u>困</u> ってるんですって理解していただけて(C)
	ベテラン	意外にその子の私が見えていなかった部分、 <u>困</u> りみたいなのをあげてくださったんで、もっとこう気付いてあげられたところが今までもあったんじゃないかなって反省しながら(P) 何かこう <u>困</u> りが出てきはったら、あかんで、こういうなかなかこうちょっと自分のしたいことしはるので、そういうところがありますよっていうのをお母様にはお伝えしたんですけど。(O)

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

表 8. 中堅保育者とベテラン保育者に共起性が高い語の語り.

抽出語	経験年数	実際の語り
一緒	中堅	友達にもすごい興味出てきたんで、その好きな友達と、こう、 <u>一緒</u> に出来るように練習も参加してもらったりとか、(H)
	ベテラン	『じゃあ、先生も <u>一緒</u> にやる。』とかいう風に声掛けを変えて一緒に参加できるようにしたことはすごく大きかったな、(Q)
違う	中堅	割と他の子とは対応が <u>違った</u> んで(F)
	ベテラン	『じゃあ、先生も <u>一緒</u> にやる。』とかいう風に声掛けを変えて一緒に参加できるようにしたことはすごく大きかったな、(Q)
相談	中堅	保護者も困ってるんだよなーとかなんか <u>違う</u> 視点で、その日からまたちょっとこう頑張れるっていうようなことはありましたね(K)
	ベテラン	いつの時期になったら今はもう <u>違う</u> よって少し強めにじゃないけど、言っていないのか、(中略)もう言ってもいいと思いますってKCからも確か言ってもらえた。(M)
一緒	中堅	しばらく時間がたつにつれてまた戻ってきたりとかもあったんで、その都度その都度 <u>相談</u> に乗ってもらってましたね(F)
	ベテラン	まだ決めつけられないじゃないけど、やから <u>相談</u> して見てもらって、(G)
一緒	中堅	しばらく時間がたつにつれてまた戻ってきたりとかもあったんで、その都度その都度 <u>相談</u> に乗ってもらってましたね(F)
	ベテラン	ちょっと <u>相談</u> に乗ってもらったりとかして、ちょっと考えたりとかまあこれでいいんだとか、まあこういう方法をちょっともう一回続けてみようかなっていう形だったなど。(M)
一緒	中堅	しばらく時間がたつにつれてまた戻ってきたりとかもあったんで、その都度その都度 <u>相談</u> に乗ってもらってましたね(F)
	ベテラン	最近気になって、この間ちょっと <u>相談</u> させてもらったんですけど。ちょっと気になるねって。(O)

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

りの内容においても、子どもと集団、園と保護者等、若手と比べると目の前の保育よりも一歩下がった視野を持ち、その関係性についての難しさをKCに語っていることがうかがえた。佐藤（2023）は「経験を重ねる中で、子どもの姿や周囲の状況をより詳細に捉えることが可能になる」としており、本研究においても目の前の子どもへの対応を主に相談していた若手保育者から、園と保護者や集団と子どもといった周囲の状況への語りが増える中堅保育者と視野の広がりが見られた。また、保護者との関係性については木曾（2011）が「保育士は『子どものため』と『保護者のため』の板挟み』を感じるようになる」と指摘している。【相談】という語において中堅保育者は“こうしていきたいけれど、どうしよう”といった、ある程度方針は決まった上で、悩んでいる様子がみられたため、先行研究同様に板挟みの中にありながら、KCとより良い手法を話し合っている傾向があるのではないかと考えられた。

③ベテラン保育者の悩み方

ベテラン保育者と共起性が強かった語は【多分】【難しい】【結構】【話す】の4語であった。保育者自身の見立てや予想についての語りや、ベテラン保育者であっても困難を感じる点についての語りが見られた。ただ、特定の悩みやすいテーマはみられなかった。

佐藤ら（2017）は幼児理解についてベテラン保育者は若手の保育者に比べて「視点を柔軟に変えている可能性」を指摘している。その場に応じて様々な見方ができるからこそ、何について相談しているかという特定の方向性があまり抽出されなかったことが推察される。一方で、抽出された語からは、これまでの保育経験やKCとの関わりによって、“【多分】こんなのではないか”等の仮説をベテラン保育者自身が有し、それについて話していると推察された。加えて、その仮説についてKCへ【話す】ことによって、情報を整理している様子も見受けられた。勿論、ベテラン保育者であっても【難しい】と感じることは保育現場において生じるため、そういった際にはKCに【相談】し、KCの専門性をそこで感じている部分もあるのではないかと考えられ

た。

2) 保育者の経験年数に合わせたKCの関わり方

本研究の結果を踏まえ、保育者の経験年数に合わせたKCの関わりについて考察したい。まず若手保育者については、KCの定期的且つ継続的に園へ関わることができる特徴を活かすことができる。目の前の保育に悩みやすく、具体的なアドバイスを求めている若手保育者にとって、定期的に相談できる機会は安心感につながると考えられる。また、KCは若手保育者の理解に合わせたアドバイスを子どもの実際の姿を基に共有できるため、取り入れやすい方略の提案をすることができる。ただ、保育者自身が考える機会を奪ってしまわないためにも、一方的に伝える形にならないよう留意する必要がある。また、語りの中でも他の保育者からの意見を得ている場合があったため、若手保育者が先輩保育者や主任保育者からの支えを得られるよう、KCが連携をとることも考えるべきである。

中堅保育者に対しては、板挟みになり悩みやすいと考えられた保護者への対応について、伝え方を心理の専門家としての視点から話し合うことができる。また、必要に応じてKCが保護者相談を行ったり、管理職とも保護者対応について相談したりすることで、中堅保育者が一人で園と保護者の間で板挟みになることを避けられる。その際には、保護者へ伝える内容について話し合ったり、保護者とのやり取りを守秘義務に留意しつつ共有したりする等、保育者と保護者の関係も大切にする必要がある。

中堅からベテランの保育者は、ある程度子どもの見立てや方向性について仮説をもっているが、確信を持ち切れなかったり、方向性は考えられているものの対応に難しさを感じたりしていることが想定された。そのためKCへの情報共有を行う中で保育者自身が現状を整理したり、気づきを得たりすることができるような話の聞き方が効果的な可能性がある。また、KCの専門的な視点からの意見が参考になったり、最後の一押しのような自信に繋がったりしている面もあると考えられた。

先述の通り、KCは経験年数それぞれに応じた活用がなされている。そういった存在が園に居ることは、保育者の保育に肯定的な影響があると推察され

る。

3) まとめと今後の展望

保育者の悩み方としては、経験が浅く自身の引き出しが中堅やベテラン保育者に比べて少ない若手保育者は、目の前の保育をどのように行うかについて悩みやすい。そのため、KCや他の保育者からその困りごとに対して具体的な対処方法をアドバイスしてもらっている様子がみられた。中堅保育者は、園と子どもや園と保護者との関係性といった視野が広がったからこそ板挟みになって悩みやすい傾向がみられた。そのため、対応方法についてKCと相談しながら集団と子どもや園と保護者の関係がより良い方向に進むような方略を考えているようであった。そして、ベテラン保育者はこれまでの経験によってある程度は自身で解決できるものの、それでも対応が難しいと感じたり、確信を持ちきれなかったりすることはある。そういった際に、KCに仮説を話して相談する中で情報の整理をしたり後押しをしてもらったりしていると考えられた。

本研究は保育者へのインタビューを分析したものである。そのため、今後はKCを対象とした調査を行い、KC目線での保育者の経験年数による子ども理解や悩み方の違いと、それに合わせたどのように保育者への関わり方についても検討する必要がある。保育者が認識している気になる子への悩みと、KCからみた保育者の悩みやそれに対する考えや対応を明らかにすることで、より気になる子についての保育者の悩み方やとるべき対応を多面的に明らかにできると考えられる。

また、本研究はKCを長期間利用している幼稚園へのインタビューとなった。よって、他のKCが居ない幼稚園における悩み方や、保育所等との違いは不明であるため、今後の調査が望まれる。

文献

安家周一・邨橋雅広・菅野信夫・辻河優(2004). 大阪府私立幼稚園連盟におけるキンダーカウンセリング事業の利用効果. 日本保育学会大会発表論文集, 676-677.
青井夕貴・矢藤誠慈郎・森俊之・石川昭義・西村重稀(2014). 保育士の経験年数別研修プログラム

に関する研究. 保育科学研究, 5, 1-20.

足立里美・芝崎正行(2010). 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて. 保育学研究, 48(2), 107-118.

衛藤真規(2015). 保護者との関係に関する保育者の語りの分析—経験年数による保護者との関係の捉え方の違いに着目して. 保育学研究, 53(2), 84-95.

藤原里美(2013). 発達障害児への保育実践能力に関する研究—専門機関の実践研修を受講した研修生の視点から. 保育学研究, 51(3), 57-68.

原口英之・野呂文行・神山努(2013). 保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題—障害の診断の有無による支援の比較. 障害科学研究, 37, 103-114.

原口喜充(2016). 日々の保育における担任保育者の保育体験—保育者の主観的体験に注目して. 保育学研究, 54(1), 42-53.

原口喜充・馬見塚珠生・矢本洋子(2018). キンダーカウンセラーの可能性—“専属性”の観点から見る園への根付き方. 日本心理臨床学会第37大会発表論文集, 410.

原口喜充・大谷多加志(2018). 保育者からみた心理専門職との協働—経験による変化と関係性に着目して. 保育学研究, 56(3), 126-136.

原口喜充・太田千景・浅井映美子・嶋野珠生・矢本洋子(2022). 幼稚園側からみるキンダーカウンセラーの有用性①—保育者に対するインタビュー調査から. 日本心理臨床学会第41回大会発表論文集, 123.

秀真一郎・若田美香(2020). 保育現場における保育者による受容の捉え方に関する計量テキスト分析. 応用教育心理学的研究, 38(1), 35-46.

樋口耕一(2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合. (数理社会科学会, 19(1), 101-115.

池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子(2007). 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究, 66(6), 815-820.

保育者の経験年数による気になる子に関する悩み方の違い

- 菅野信夫 (2004). キンダー (保育) カウンセリングの現状と展望. 天理大学カウンセリングルーム紀要, **1**, 47-54.
- 木曾陽子 (2011). 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス——保育士の語りの質的分析より. 保育学研究, **49** (2), 84-95.
- 木曾陽子 (2016). 未診断の発達障がいの傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係——バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より. 保育学研究, **54** (1), 67-78.
- 丸山美和子 (2008). 保育現場に生かす「気になる子ども」の保育・保護者支援<保育が好きになる実践シリーズ>. かもがわ出版.
- 日光絵利 (2018). キンダーカウンセラー事業による継続的な支援についての効果の実感——気になる子どもに対する保育効力感に着目して. 幼年児童教育研究, **30**, 29-36.
- 佐藤有香・相良順子 (2017). 保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い. 日本家政学会誌, **68** (3), 103-112.
- 佐藤有香 (2023). 保育者の経験年数による「子ども理解」の視点の違い——新任者・中堅者・熟練者を対象に. 日本家政学会誌, **74** (3), 36-43.
- 全国保育協議会 (2016). 会員の実態調査報告書.
- 全国保育協議会 (2021). 会員の実態調査報告書.

付記

本研究は一般社団法人日本心理臨床学会 2020 年度研究助成 (No.2020 (iii) -5) を受けている。また、本研究は日本心理臨床学会第 42 回大会で発表した内容を加筆修正したものである。

分析の進め方についてご助言をいただいた立石力斗先生、研究会の中でご意見をいただいた嶋野珠生先生、矢本洋子先生、浅井映美子先生に感謝申し上げます。